

能登を 知りたい

珠洲市では、諸国を巡歴して不思議な現象を起こす乙女「比丘尼」の伝説をあちこちで聞く。同市に長く在住する記者が、断片的だった地域と伝説との関わりを調べ直してみよう。

まず向かったのは、同市上戸町の真言宗高照寺。入り口に「倒さ杉」と呼ばれる高さ十二メートル、幹回り六・七四メートルの大木がある。平安時代の天喜年間(一〇五二―一〇五八年)、比丘尼が昼食で用いた箸を逆さに挿しておいたのが成長したとされる。

三十二代目住職の中村明博さん(三三)は「比丘尼は目を患っていたが、本尊の薬師如来に手を合わせて治った。お札に使った箸です」と寺に代々伝わる話を明かす。

比丘尼は春先に花を咲かせ、春の訪れを告げて歩いたとされる。徳保八幡神社社叢内のヤブツバキ群生地「徳保

珠洲の「比丘尼」伝説

の千本椿」はその一つだ。ツバキは市の花でもある。海岸から平野部、低山と至る所に生息していることから選ばれた。

毎年三月に椿フェスティバルを開催している大崎塾顧問の平田天秋さん(七〇)は「比丘尼と千本椿の関連は分からない」としながら、「ツバキが

能登から東北に伝わったとの伝承がある」。ツバキそのものは人の手によって広がったのかもしれない。

二つの話はどうやら植物と関係があるようだが、民俗学に詳しい日本宗教学会委員の西山郷史さん(六九)「珠洲市飯田町」が教えてくれた。比丘尼が植えたと伝わる杉

などの木は各地に数多い。「特にツバキは、赤い花を咲かせることによって、新しい年が始まることを実感できる。雪の中に命を見いだす北

陸人の姿が垣間見られ、それが伝説と結びついたのでは」と考える。一方、「伝説が海洋ルートを通じて広がった可能性があ

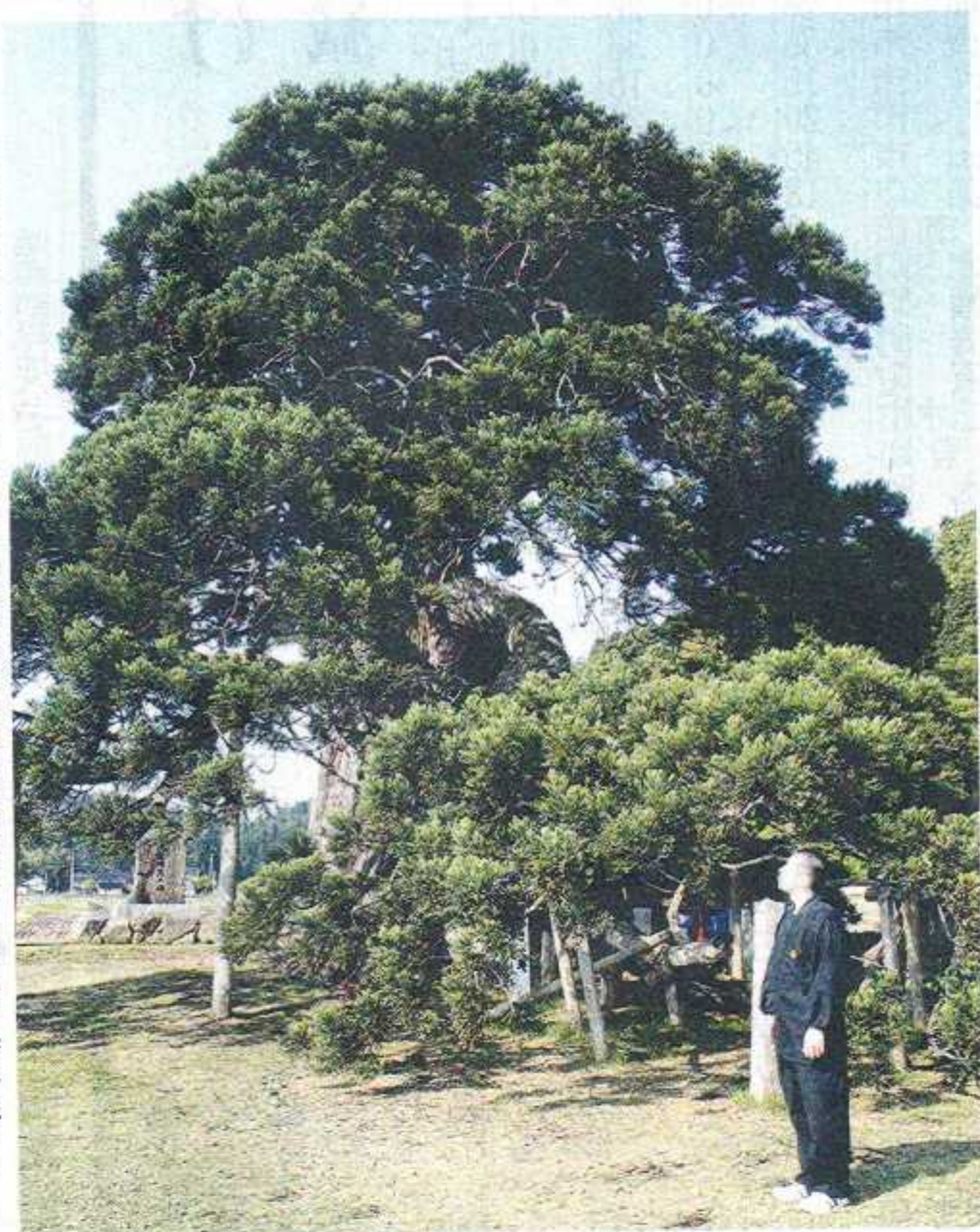
伝統や風土と融合

る」と語るのは、珠洲焼資料館の市教委事務局次長の大安尚寿さん(五八)。珠洲焼の流通経路と伝説が重なっているといる。中世に大量生産技術が確立され、当時は全国でも屈指の焼き物だった珠洲焼は、兵庫県にルーツがあり、北海道や東北に伝わった。沈没船から流出したのか、新潟、山形両県の沖合の海底から破片が見つかっている。

西山さんも「比丘尼の話を伝えたのは、江戸時代以降は北前船ルートも通じたのだろう」と海上ルートとの関連を指摘する。

不思議な現象は、宗教集団が布教する際につくり上げたものが、今という都市伝説になったとも。いずれにしても、珠洲の比丘尼伝説は、日本海に突き出た能登半島の伝統や文化、風土と合わさり、中継されたのではないかと(近江士郎)

「能登を知りたい」は、地域密着型の企画です。能登各地に住む記者が地元の話題を随時、お届けします。



比丘尼の伝承がある「倒さ杉」を見上げる中村明博住職(珠洲市上戸町)

比丘尼伝説 白比丘尼(しらびくに)、八百比丘尼(やおびくに)とも呼ばれ、全国的には「若狭(現福井県)の白比丘尼」で通っている。肌が白くて美しく、人魚の肉を食べて800歳まで生きた。伝承地は東北から北九州まで150カ所以上、能登にも十数カ所ある。